

いま、小さい太郎の胸に
ひろがった悲しみは、
なくことのできない悲しみでした。



新美南吉



にいみなんきち
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町(現・半田市)に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

あらすじと解説

お婆さんと二人きりで暮らす太郎が、捕まえたカブトムシで遊ぼうと友だちを訪ねて回る。金平ちゃんは腹痛で寝ていた。ひとつ年上の恭一君は三河の親戚に預けられていた。最後に車大工の息子で遊びの名人の安雄さんを訪ねる。真剣な表情で道具を研いでいる安雄さんに小声で声をかけると、おじさんに「安雄はもう大人だから、子どもとは遊ばん」と突っぱねられて

しまう。病気なら治ればまた遊べる。よそにもらわれても盆や正月にはまた会える。しかし、大人になった安雄さんとは、もう二度と同じ世界で遊べない。太郎の心にそれまで知らなかった悲しみが広がる…。寂しかった自身の養子体験も反映した南吉最晩年の作品である。

▶▶ 新美南吉記念館学芸員 遠山光嗣

絵

ひやま ちさと

イラストレーター 水彩、ペン、リトグラフなどで描いています。絵の向こう側にある物語が、じんわり伝わりますように。鳥取出身、大阪在住。
<http://usuratararisu.jimdo.com/>

●絵について 「小さい太郎のことを思うと、もういい大人なのに、悲しくなってきました。みんな通ってきた道なのだなあ、と思います。」